

構文の機能的役割： 宮沢賢治のドイツ語訳テキストを手がかりに¹

島 憲 男*

要 旨

本論考では、ドイツ語の「他動詞型結果構文 (Transitive Resultative Konstruktionen: TRK)」、 「自動詞型結果構文 (Intransitive Resultative Konstruktionen: IRK)」、 「同族目的語構文 (Kognates Objekt: KO)」そして「オノマトペ構文 (Onomatopoeikum: ONOM)」を取り上げ、ドイツ語に翻訳された宮沢賢治の作品を用いて当該構文のドイツ語テキスト内での生起頻度とその構文的役割を調査した。その結果、これまでの研究成果が検証されたと同時に、各構文は人間の感覚領域と密接に関連しているものであることが判明した。さらに、今回の構文は、どれも言語使用の場面においてより具体的で、個別的、可視的な描写に寄与していると言う点で、Talmy (1985, 2000) の言う「語彙化」の過程とは反対の方向を指向する文法的な過程であることも主張した。

キーワード：結果構文，同族目的語，オノマトペ，感覚領域，文法的構文ネットワーク

1. はじめに

本論考では、これまで執筆者が関心を持ってきたドイツ語構文のいくつかを取り上げ、当該構文がテキストの中で実際にどの程度使用されているか、そして当該構文がどのような役割や効果を担っているかを調査した結果を報告する。論考執筆者は、「構文」を「形式」と「意味」の複合体と捉え、ある特定の統語構造で具現化した文法的構成体（形式）が一定の内容（意味）と結びつく時、その「形式」と「意味」のまとまり全体を「構文」とみなしている。

これまで論考執筆者は主にドイツ語を原典とするテキストを使ってドイツ語の構文分析を進めてきたが、本論考ではドイツ語に翻訳されたテキスト、具体的には宮沢賢治 (1896 - 1933) の複数の作品（詳細は第2節を参照）を用いて、日本語の原典をドイツ語に変換させたテキストを分析対象とした。言語の構造分析の対象に翻訳書を使用することについては、賛否両論、様々な考え方ができると思われるが、執筆者が本論考で敢えて翻訳書を活用しようと考えた理由は、まず第一に、すでに論考執筆者の元でドイツ語を原典とするテキストを使っての構文分析が一定程度完了していることがある。日本語から翻訳されたドイツ語には、翻訳者の好む文体が頻出することや、原典の言語である日

* 京都産業大学外国語学部・京都産業大学ことばの科学研究センター

本語の文法的な構造がある程度影響を与えていることなどを当然想定しなければならないものの、必要に応じてこれまでの分析結果と比較・対照することで特異な現象や不自然な状況などを適切に排除できるだけでなく、研究上の更なる展開の可能性が新たに提供されうると考えているからである。さらに、日独翻訳の際に、ドイツ語訳テキストを生み出していく翻訳者は、日本語を介して知覚・認知した出来事や事象をドイツ語という言語を使って言語化していく中で、認知した出来事や事象を最も適切な表現方法で再構築しようと試みるため、外界での出来事や事象を認知した知覚者がそれを当該の言語でどのように同一のものとして表現するかの比較・検討が間接的に可能になり、ドイツ語と日本語という異なる系統の言語間での言語類型論的な比較対照が可能になるとも期待している。このことは従来までのドイツ語を原典とするテキストに基づく構文分析とは異なる視点からの構文分析を実行することを意味し、新しい発見が期待されるだけでなく、人間が共通に有している認知能力を使って知覚・認知した状況を言語化するストラテジーを解明する上でも非常に重要な視座を提供してくれると考えている。例えば、原典からの影響や翻訳者の好む文体について、例文(1)が示すとおり、原典の日本語ではオノマトペ(擬音・擬態表現)が使用されているにもかかわらず、そのドイツ語訳では一様の表現方法が用いられず、それぞれ異なった形式での翻訳、あるいはより正確には、翻訳者によって「(内容的に)等価である」と判断された表現が用いられている：

(1) 夏目漱石『我が輩は猫である』より

- a. 赤い首輪につけた鈴がちゃらちゃらと鳴る。(37頁)

Das Glöckchen, das an ihrem roten Halsband befestigt war, klingelte hell. (S. 49f.)

- b. ...ニャーニャーと愛嬌を振り蒔いて膝の上に這い上がってみた。(79頁)

..., ergo maunze ich liebenswürdig und versuchte, auf seinen Schoß zu klettern. (S. 107)

- c. 機嫌の悪い時はやけにがあがあやる、... (54頁)

Ist er schlecht gelaunt, schallt ein schreckliches GaaGaa! aus seinem Rachen, und ... (S. 74)

例文(1a)で、夏目漱石が記した鈴の音色は「ちゃらちゃら」ではあるものの、ドイツ語への翻訳は鈴(Glöckchen)の奏でる音を最も自然に連想できるよう動詞 klingen (ベルが鳴る)を中心とした動詞句 hell klingen を用いて表現されている。ドイツ語にも鈴の音色を表すオノマトペとして、klingeling, klingling といった同系のオノマトペ表現があることを考慮すれば、翻訳者が日本語からドイツ語への変換を行なった際に特に意識したことは、原典の持つ形式や構造の保持ではなく、原典に登場する鈴の発する軽やかな音色への無理のない想起であり、それを端的に表すドイツ語の表現方法であったと考えられる²⁾。同種の考察は、基本的には例文(1b)にも当てはまると考えられる。例文(1a)同様、猫の鳴き声を表すオノマトペ miao を用いた翻訳も全く不可能ではないと思われる一方で、例文(1b)ではその鳴き声を組み込んでいる動詞 maunzen を用いている。この動詞が、より一般的な動詞であると思われる miauen と異なる点は、悲哀の籠った音(この場合は、「鳴き声」)を長く延し

て発する状況 ([lang gezogene] klägliche Laute von sich geben) が際立たされていることである³。このように翻訳先の言語となるドイツ語にも同等あるいは類似の表現がある場合には、一般的に翻訳者はドイツ語母語話者の内容理解や状況把握のために当該言語に既に存在する表現を積極的に活用するものの、類似・対応表現がない場合には、日本語のオノマトペを敢えて翻訳せず、単にドイツ語表記に切り替えたものを使い、状況を説明的に描写して当該のオノマトペの意味が読者に正しく伝わるよう配慮しているように見える。例文 (1c) では、schallen (響く、鳴り渡る、響き渡る) や aus seinem Rachen (喉から)、schrecklich (恐ろしい、酷い、怖い) といった一連のドイツ語表現が日本語のオノマトペをそのまま転写したドイツ語の名詞表現 GaaGaa! の否定的なニュアンスや発声の状況を説明的に描写している。

本論考で取り上げる構文は、(a) 事態を引き起こす基底動詞と結果状態を表す結果項の相互作用によって名詞句の最終結果状態を描写する「結果構文」、(b) 自動詞を基底動詞としつつも文中に同語源である対格名詞を生起させる「同族目的語構文」⁴、(c) 日本語の擬音・擬態表現に相当すると考えられるオノマトペが生起する文 (オノマトペ構文) である。各構文の持つ文法的特徴の詳細は第3節で確認する。続く第4節では、ドイツ語に訳された宮沢賢治の作品中に当該の構文がどの程度生起しているのか調査したデータを示す。第5節ではこれまでの研究成果と今回の調査結果とを融合・統合させ、今後の研究の方向性を提示する。

2. ドイツ語訳テキスト

本論考では、宮沢賢治の作品のうち、以下の18作品を分析対象とした。ドイツ語訳は、Johanna Fischer (1980/1994²) に収録されているものを使用した：

- ① Der Wolfswald, der Korbwald und der Diebwald (「狼森と策森, 盗森」)
- ② Die Vulkanbombe mit dem guten Herzen (「気のいい火山弾」)
- ③ Das junge Echo (「若い木霊」)
- ④ Die Nacht im Eichenwald (「かしわばやしの夜」)
- ⑤ Die Eicheln und der Luchs vom Berge (「どんぐりと山猫」)
- ⑥ Die Früchte des Ginkgobaumes (「いちょうの実」)
- ⑦ Der Lederkoffer (「革トランク」)
- ⑧ Das Gasthaus mit den vielen Aufträgen (「注文のおおい料理店」)
- ⑨ Das Büro der Katzen (「猫の事務所」)
- ⑩ Der Brüllfrosch und sein Trupp (「カイロ団長」)
- ⑪ Der Große Bär der Krähen (「からすの北斗七星」)
- ⑫ Der weiße Elefant (「オッペルとぞう」)
- ⑬ Die Zwillingsterne (「双子の星」)

- ⑭ Der Drache und der Dichter (「龍と詩人」)
- ⑮ Das Kind der Wildgans (「雁の童子」)
- ⑯ Der Nachtfalkenstern (「よだかの星」)
- ⑰ Das Netz des Indra (「インドラの網」)
- ⑱ Die Bären vom Nametoko (「なめとこ山の熊」)

3. 調査対象とした構文：4種類3構文

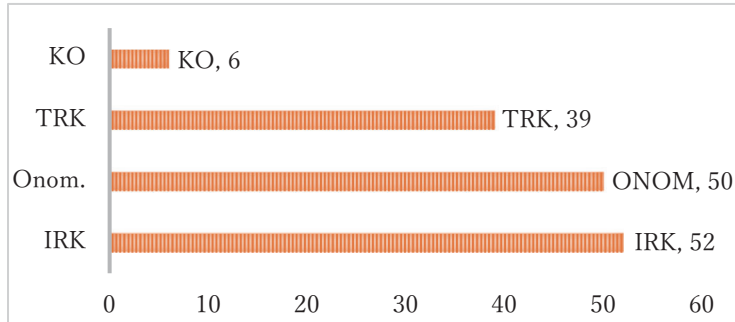
第1節の最後に記した通り、本論考では「結果構文」, 「同族目的語構文」そして「オノマトペ構文」の3構文を分析対象としたが、「結果構文」は文全体が他動詞型にコードされるものと、自動詞型にコードされるものにさらに細分化できるため⁵, 実際の調査は結果構文を2分した上で行った。従って、今回の調査対象となった構文は、4種類3構文となる。「他動詞型結果構文」, 「自動詞型結果構文」, 「同族目的語構文」, 「オノマトペ構文」である。

他動詞型結果構文 (Transitive Resultative Konstruktionen: **TRK**) は「主語 (S[ubject]) - 動詞 (V[erb]) - 対格目的語 (A[ccusative]) - 結果項 (R[esult] P[hrase])」の構造を有するのに対し、自動詞型結果構文 (Intransitive Resultative Konstruktionen: **IRK**) は「主語 - 動詞 - 結果項」をその必須構成素としている。同族目的語構文 (Kognate Objekte, **KO**) は「主語 - 動詞 - 同語源の対格目的語 / 対格名詞 (K[ognate] O[bjekte])」の統語形式で生起し⁶, オノマトペ構文 (Onomatopoeica, **ONOM**) は文の形態としては特定の統語的実現形とは結びついていない。これらを模式的にまとめると、以下の様になる：

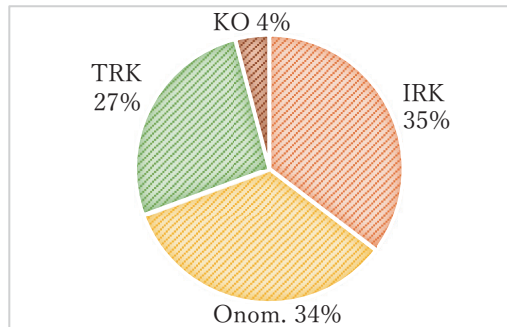
- i) 他動詞型結果構文 (TRK): **S - V - A - RP**
- ii) 自動詞型結果構文 (IRK): **S - V - RP**
- iii) 同族目的語 (KO): **S - V - KO**
- iv) オノマトペ (ONOM)

これら4種の構文が第2節で記したドイツ語訳の宮沢賢治作品にどの程度出現したかを概観すると、以下のようになる：

グラフ 1：4 構文の生起数 (Token)



グラフ 2：4 構文の生起率 (%)



最頻出の構文は自動詞型結果構文 (IRK) ではあったが、次のオノマトペ (ONOM) の生起率もほぼ同程度と見做して良いだろう。第 3 位の他動詞型結果構文 (TRK) は幾分使用率が下がるものの、自動詞型結果構文と合わせ「結果構文」として考えた場合、その生起率は 6 割を超える非常に高いものとなっている。同族目的語構文は顕著にその出現頻度が低いが、それは同一の、あるいは類似の同系表現を繰り返すことを避ける傾向の強いドイツ語の文体的な制約が強く働いているからなのかもしれない。以下では、順次 4 種の構文を具体例に基づいて確認していく。

3.1 他動詞型結果構文 (TRK): S - V - A - RP

論考執筆者は「結果構文」全体をその文法的な性質から均一的な構文ではなく、複数のサブタイプ (Subtyp: ST) を有する不均質な構文であると捉えている (Shima 2020, 島 2021 等を参照)。そのため結果構文内部の構造には、それが他動詞型結果構文 (TRK) であれ、自動詞型結果構文 (IRK) であれ、互いに有機的な関係で結びついているサブタイプから成り立っていると仮定している。その内容を模式的に示せば、以下の図のように表すことが可能であると考えている：

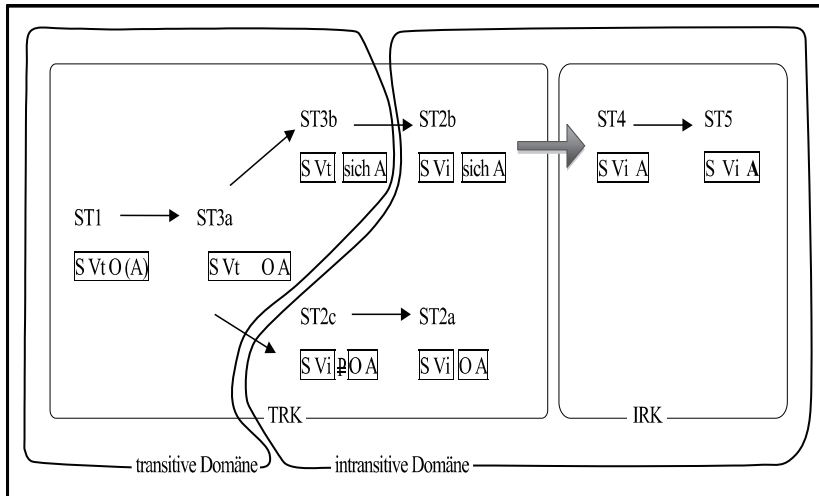


図1：結果構文とサブタイプ (Shima 2021: 35, 図2, 但し一部変更がある)

他動詞型結果構文 (TRK) は、3つの分類基準、すなわち「結果項 (RP) の任意性/義務性」, 「文の主動詞の自他動性」そして「対格目的語への統語的制約」によって6種類のサブタイプに分類でき、それぞれのサブタイプは、図1で示したように、隣接するサブタイプの統語的あるいは意味的性質を僅かずつ発展・拡張・変質させながら有意な関係で結びついている (詳細は例えば島 2021 を参照)。論考執筆者が他動詞型結果構文に仮定している6種類のサブタイプの用例は以下の表1のようにまとめることができる：

表 1：他動詞型結果構文（TRK）中のサブタイプ 6 種類（Shima 2021: 30, 表 1）

結果項	主動詞	目的語	サブタイプ
随意的	他動詞		<p>ST 1: S Vt O A</p> <p>① Er fegte <i>den Boden</i> <u>sauber</u>.</p> <p>② <i>einen wach</i> küssen</p>
義務的	自動詞	語彙項目	<p>ST 2a: S Vi O A</p> <p>③ Er hustete <i>seinen Nachbarn</i> <u>krank</u>.</p> <p>④ Der Kaffee steht schon seit ein paar Minuten auf dem Tisch: wir haben <i>ihn</i> <u>kalt</u> geplaudert.</p>
		再帰形	<p>ST 2b: S Vi <u>sich</u> A</p> <p>⑤ Eine alte Frau schreit <i>sich</i> <u>heiser</u>.</p> <p>⑥ Deine Krankheit kommt vom Müßiggang, jetzt mußt du <i>dich</i> doch endlich einmal <u>gesund</u> arbeiten.</p>
		前置詞格	<p>ST 2c: S Vi P O A</p> <p>⑦ Peter tanzt <i>seine Partnerin</i> <u>müde</u>.</p> <p>⑧ Hier sind eine Menge krumme Nägel; du sollst <i>sie</i> mit diesem Hammer <u>gerade</u> klopfen.</p>
	他動詞	語彙項目	<p>ST 3a: S Vt O A</p> <p>⑨ Er aß <i>seinen Teller</i> <u>leer</u>.</p> <p>⑩ Ich habe die Nacht durchgewacht und mir <i>die Finger</i> <u>wund</u> und <i>die Augen</i> <u>rot</u> geschrieben.</p>
		再帰形	<p>ST 3b: S Vt <u>sich</u> A</p> <p>⑪ Er hat <i>sich</i> <u>satt</u> gegessen.</p> <p>⑫ Ein Dieb stiehlt <i>sich</i> <u>selten reich</u>.</p>

ドイツ語に翻訳された宮沢賢治の作品を使用した今回の調査で、他動詞型結果構文（TRK）は Token ベースで 39 例確認され、当該構文の使用率は調査構文全体の約 1/4（27%）を占めている（上記の グラフ 1, 2 を参照）⁷：

- (2) a. „Alle runden und rundlichen Dinge sollen wie Eier knacks! kaputtgeschlagen werden!“ (S. 24 / Nr.180, 気のいい火山弾) [ST 2c]⁸

「まるいものや、まるいようなものは、みんな卵のように、パチンと割ってしまうそだよ。」
(180 頁 / A)

- b. Sie schöpften Quellwasser und begannen, *die Wunde* sauber auszuwaschen. (S. 164 / Nr. 185, 双子の星) [ST 1]

二人は泉の水をすくって、傷口にかけて綺麗に洗いました。(13 頁 / D)

例文 (2a) は、受動文として生起している点や、結果項が主動詞の過去分詞と結合して一語書き (kaputtgeschlagen) されている点で、些か読みにくくなっているかもしれないが、auf alle runden und rundlichen Dinge schlagen (まるいものや、まるいようなものを打つ・叩く) という出来事・事象と、その出来事・事象の結果生じる状態を示す結果項 kaputt (駄目になった・壊れた) からなる結

果構文である。2つの出来事・事象が合わさって1文の結果構文として言語化される際に前置詞 *auf* が消失して他動詞型の結果構文として具現化されるという点から ST 2c に分類している。例文 (2b) は、*zu* 不定詞句表現として生起している部分が結果構文で、*die Wunde auswaschen* (傷口 (の汚れ) を洗い流す・すすぎ流す) という出来事・事象と、その出来事・事象の結果生じる状態を示す結果項 *sauber* (清潔に・綺麗に) から成り立っている。仮に結果項 *sauber* がなかったとしても、*zu* 不定詞句表現の文法性には問題がないため、随意的な結果項を含む ST 1 に分類する⁹。

3.2 自動詞型結果構文 (IRK): S - V - RP

今回の調査では最も多くの例文が見つかったこの形式の構文は、図1に挙げた、結果構文の内部構造を示した図では右側に位置し、他動詞型結果構文の上の拡張ルートである「対格目的語の再帰代名詞化」、すなわち「主体と客体の意味的な同一化」の系列¹⁰との関連性・連続性を有している¹¹。

自動詞型結果構文では、文中の自動詞は完全自動詞であり、結果項自体は自動詞にとって義務的な必須成分ではないため、他動詞型結果構文とは異なり、構文中に生起する結果項の統語的・意味的性質によってサブタイプを分ける事はできない。その一方で、自動詞型結果構文の結果項も、他動詞型結果構文の場合同様、自動詞の表す行為や過程から想定される結果状態を具現化するという意味的機能を有しているため、論考執筆者は結果項の表している結果状態の把握がどのようになされているかを基準に自動詞型結果構文を分類した。結果状態を客観的・物理的に把握するのか (objektiv)、あるいはその把握は主観的なものなのか (subjektiv) という区別である。自動詞型結果構文に生起する結果項は、色や光、音といった人間の知覚に深く関係するものが目立ち¹²、特に色彩表現に関する用例は圧倒的多数を占めた：

- (3) a. Aber dann war eines Morgens *die Erde hart* gefroren. (S. 13f. / Nr.16, 狼森と策森, 盗森) [ST 4]
ところが、土の堅く凍った朝でした。(31頁/A)
- b. Nun wurden die Wolken mausgrau und *die Berge hinten* glühten tiefrot. (S. 208 / Nr. 51, よだかの星) [ST 5]
もう雲は鼠色になり、向こうの山には山焼けの火がまっ赤です。(34頁/D)
The clouds were gray by now, and *a forest fire* glowed red on the hills in the distance. (70頁/Bester 1972)¹³
- c. In diesem Moment barst *der große bleichleuchtende Komet in Stücke*. (S. 176/Nr. 47, 双子の星) [ST 5] [ST 4]
見るとあの大きな青白い光のほうきぼしはばらばらにわかれてしまって ... (29頁/D)
- d. Die Sterne waren ganz verloschen. Es war, als ob *der Himmel im Osten weiß* glühte. (S. 73f./Nr. 24, いちようの実) [ST 5]

星がすっかり消えました。東のそらは白く燃えているようです。(12頁/B)

e. *Die Eibenzweige griffen tiefschwarz übereinander, so daß auch nicht ein Stück mehr vom Himmel zu sehen war, ...* (S. 59 / Nr. 24, どんぐりと山猫) [ST 5]

樞 (かや) の枝はまっくろに重なりあって、青ぞらは一きれも見えず、... (14頁/A)

上記の例文 (3a) は、従来から先行研究でも取り上げられているような典型的な自動詞型結果構文の例である。土が凍った結果生じた結果状態である「堅く (hart)」は、基底動詞 *frieren* の表す凍結過程から通常想定される結果状態を具現化して表したもので、第三者でも容易に共有できる結果状態として客観的・物理的な状態変化として表現されている。論考執筆者はこのタイプの自動詞型結果構文を ST 4 に分類している (図 1 参照)。それに対して、例文 (3b) の自動詞 *glühen* は元来は「(明るい炎がなく) 赤く光りながら燃える、熱のために赤く光る」事象を意味する動詞であり¹⁴、この文全体は「向こうの山」が「山焼け」の結果、新たに生じた結果状態として「まっ赤」になってしまったというわけではない。ごく無難な解釈をすれば、この「まっ赤」は、「山焼け」時の「向こうの山」の一時的な状態を説明する描写述語 (depiktiv) と解釈することになるだろう。確かにこの要素が、例文 (3a) のような容易く理解・共有できる典型的な結果項の例ではないという点はその通りである。しかし、この「まっ赤」が「山焼け」時の「山」の状態を単に描写していると理解するだけでは不十分なのではないだろうか。この事象には、「山焼けの火」を見て、その輝きや色を「まっ赤」であると知覚し、その知覚内容を言語化する人間、より一般的に言えば、外界の出来事や事象を知覚する主体である知覚者の存在が前提となっていると考える必要があると論考執筆者は考えているからである。この知覚者は典型的には人間であり、実際には必然的に存在しているにもかかわらず、言語化された事象の中には必ずしも生起するわけではない。自動詞型結果構文は、他動詞型結果項文と異なり、変化を被る客体が主語として言語化されるからである。例文 (3b) の「山焼けの火」は、自動詞 *glühen* の持つ語義とも相まって「赤」と結びつきやすいものの、この例文では、より具体的に詳細な記述である「まっ赤 (*tiefrot*)」として具現化している。このことは、自動詞の表す燃焼・閃光過程から通常想定される結果状態が「赤」で、それが結果項としてそのまま具現化しなければならないわけではないことを意味している。重要なのは、知覚者が「山焼けの火」をどのように知覚し、その知覚内容をどのように言語で表現するかであるからである (Croft 1991: 89 参照)。このように考えると、例文 (3b) の事象 (*die Berge hinten glühten tiefrot*) は、自動詞で言語化された事象を知覚者がまず知覚し、その知覚した結果を知覚者自身の主観的な判断として *tiefrot* (まっ赤) と言語化したという意味で、十分結果的であると考えられないだろうか。言い換えれば、主語としてコード化されている *die Berge hinten* に関わる色彩語 *tiefrot* は、知覚者の知覚結果に基づいて言語化された主観的な判断結果なのである¹⁵。例文 (3a) が主語の結果状態を客観的に描写する自動詞型結果構文であるとすれば、例文 (3b) で検討したものは、言わばその拡張型とも言えるもので、主観的に知覚された結果の状態を描写する自動詞型結果構文と呼ぶことができるであろう。「知覚した外界の状況を主観的に

判断した結果の状態」が出来事・事象の継続に合わせて一定の期間続くという意味では「描写の述語」とみなされる可能性は十分ありうるものの、「継続する状態」が生み出され、言語化される過程までを視野に入れた場合、典型的な描写述語の持たない「知覚者の判断結果」という看過できない重要な特性から結果述語と認定する方が適切であると論考執筆者は判断し、例文 (3a) タイプの自動詞型結果構文 (ST 4) と区別して、例文 (3b) タイプの自動詞型結果構文を Subtyp 5 (= ST 5) と分類している。

自動詞型結果構文のカテゴリーの中にも拡張型のサブタイプを仮定することで、多様な例文の木目細かな分析が可能となる。例文 (3c) の主部である *der große bleichleuchtende Komet* (あの大きな青白い光のほうきぼし) には、主語である *der Komet* を修飾する冠飾句部分に ST 5 に分類される自動詞型結果構文 (*bleichleuchtende*) が生起している。この修飾部は、もともとは *der Komet leuchtet bleich* という文から派生していると考えられるが、*bleich* (青白い) の部分が知覚者の主観的判断に基づく色彩表現である。興味深いことに、例文 (3c) は文全体としては、前置詞句で表現された結果項 (in Stücke) を有する客観的な事象の描写に基づく ST 4 の自動詞型結果構文となっており、同時に2種類のサブタイプが1文に生起している貴重な例文となっている。また、例文 (3d) は、例文 (3b) と同様、主動詞に *glühen* が用いられているものの、*der Himmel im Osten* (東のそら) の色は *glühen* と典型的に結びつく色彩表現である「赤」ではなく、*weiß* (白) と知覚され、そのように言語化されている。最後の例文 (3e) で *tiefschwarz* (まっくろ) と表現されている対象は樞の枝が重なりあっている部分で、本来的には典型的に結びつくような固有の色彩を持つものではなく、知覚者が幾重にも重なりあった樞の枝を見て知覚・認識した主観的な色彩と言える。

3.3 同族目的語 (KO): S - V - KO

同族目的語は、形態的・統語的・意味的観点から典型的な対格目的語とは異なる性質を多数有している (Shima 2006) が、生起する構文中で果たす意味機能・構文的機能に注目すると、注 12 でも記したように、上記自動詞型結果構文の ST 5 に生起する結果項が担う構文的機能と類似していると言える。論考執筆者は同族目的語を取るとされる動詞を先行研究より抜き出し、動詞群のまとまりを意味地図 (semantic map) の形で提示した：

verbs)」も目立つ¹⁶。また、「放出動詞 (emission verbs)」の領域は、その名の通り、何かを放出することを意味する動詞群から構成されているが、その放出物に注目すると、興味深いことに、この領域では音の放出を意味する動詞が数多く見られる。また、放出動詞は、自らの感情を声や音、顔つき、態度、振舞いなどで表わすという点で、意味的には「感情動詞群 (emotion verbs)」にも近く、さらにはそのように放出されたものは人間の五感を通じて知覚されるという点で、知覚動詞とも接近していく。このような方法で同族目的語の持つ機能を捉え直すことで、同族目的語の構文的機能を「話者が自身の感覚器官を通じて知覚した外界の刺激や情報をどのように理解し、把握・解釈したかを言語的に表示するメカニズム」(島 2019a, Shima 2019b) と抽出し、まとめることが可能である¹⁷。

ドイツ語に翻訳された宮沢賢治の作品を調査した結果、同族目的語構文は Token ベースで 6 例、当該構文の使用率は調査構文全体の 4% と、今回分析対象としている構文の中では最少であった (グラフ 1, 2 参照)。

- (4) In den Wipfeln, die schwarz und schlüpfrig waren wie Riemen-Tang, träumte das Kanonenboot mit der schönen Stimme nacheinander verschiedene **Träume**: ... (S. 138/Nr. 82, からの北斗七星)

その昆布のような黒いなめらかな梢の中では、あの若い声のいい砲艦が、次から次へといろいろな夢を見ているのでした。(60 頁 / A)

例文 (4) の主動詞である *träumen* は、対格目的語を伴わない自動詞として様態表現などとともに生起する用法の他に、「夢に見る、あるいは夢で体験する具体的な内容」を対格目的語や補文の形式で伴う用法も知られている¹⁸が、ここでは、*träumen* と同語源の対格名詞 *Traum* の複数形が生起し¹⁹、日本語の「いろいろな夢を見ている」という表現に相当するドイツ語表現を形成している。*träumen* が同族目的語と生起することは、従来から先行研究でも取り上げられており、一部の独和辞典には同族目的語の例文も記載されるほど典型的な同族目的語構文をとる動詞の例であると言える²⁰。例文 (4) でドイツ語への翻訳者が知覚し、把握した原文の状況 (「あの若い声のいい砲艦が、次から次へといろいろな夢を見ている」) は、「いろいろな夢」という表現から「個別的で、複数の (種類の) 夢」であると判断・解釈され、複数形を用いた同族目的語表現 (*nacheinander verschiedene Träume träumen*) として言語化されたと考えられる。

3.4 オノマトペ (ONOM)

ドイツ語のオノマトペとは、Bußmann (2002: 484) によれば、*Wortprägung durch Nachahmung natürlicher Laute* (自然音の模倣による造語) と定義されているが、Porzig (1950/1971⁵: 23) による *Lautübertragungen* (音転写) という指摘²¹からも読み取れる通り²²、人間の感覚領域との関係では、圧倒的に聴覚領域が優勢なものとなっている。乙政 (2009) は、実際にドイツ語のオノマトペ 894

種を収集し²³、その音素形成と音素配列からドイツ語オノマトペの意味分析を試みている。その一方で、日本語の豊かなオノマトペ表現は、第1節の例文(1)で示したように、ドイツ語では様々な形式で翻訳・変換される。根本(2015)による『オノマトペ和独小辞典』には、見出し語約1450語の日本語オノマトペに対応する様々な形式のドイツ語表現が収集されている。

宮沢賢治のドイツ語訳を調査した結果、オノマトペはTokenベースで50例、当該構文の使用率は調査構文全体の34%と、今回の論考で分析対象としている構文の中では自動詞型結果構文の出現頻度に次いで、第2位の頻度で使用されていた(グラフ1, 2参照)。論考執筆者は、オノマトペ表現が豊かな日本語の中でも独特のオノマトペ表現を駆使する宮沢賢治の使用した日本語表現の場合、日本語の音をそのままドイツ語で使う「転写・転用」が主流となると予測を立てていたが、その予測とは裏腹に、「転写・転用」による翻訳は意外と少なく、ドイツ語本来のオノマトペ表現に変換された用例が多数を占めていた。

(5) a. „... Alle runden und rundlichen Dinge sollen wie Eier knacks! kaputtgeschlagen werden!“ [= 例文 2a]

..., まるいものや, まるいようなものは, みんな卵のように, パチンと割ってしまうそうだよ。]

b. Die Pilze setzen eifrig bim, bim, bim ihre seltsame Musik fort. (S. 58/Nr. 98, どんぐりと山猫) きのこはみんないそがしそうに, どってこどってこ, あのへんな楽隊をつづけました。(14頁/A)

But the mushrooms were already busy again, playing their peculiar music, tiddley-tum-tum, tiddley-tum-tum... (27頁/Bester 1996)

例文(5a)では、knacks! (パチン) というオノマトペは受動文として言語化されている他動詞型結果構文の中に生起している。文の構成要素という観点からは、このオノマトペ表現は、文の成立に必要な必須要素(Ergänzung / argument)ではなく、自由に添加された要素(Angabe / adjunct)ではあるが、「打って(叩いて)駄目(壊れた状態)にされる」という出来事・事象の中で実際に発生し、その場にいる者に聞こえてくる「音」を文中で合わせて表現することで、当該の出来事・事象の具体性をより高め、臨場感を生み出すことに多大な貢献をしていると言える。このドイツ語オノマトペは、日本語の「パチン」の音転写・音転用ではなく、「堅いものの折れたり壊れたりする音」²⁴を表すドイツ語のオノマトペであり、翻訳者がこのオノマトペを挿入することでドイツ語母語話者にとっては特定の音をイメージしやすく、それだけ原文の描写する状況がわかりやすくなっていると言えるだろう。例文(5b)も同様に、bim, bim, bimというオノマトペ自体は、文の必須要素でもなければ、原文のオノマトペである「どってこどってこ」の音転写・音転用でもないが²⁵、「きのこがいそがしそうにあのへんな楽隊をつづける」という出来事・事象の中に生起することで、楽隊の奏でる音楽がより詳細で具体的に描写され、あたかも実際に目の前で演奏を聞いているかのような一体感を

生み出すことに役立っていると思われる。

4. 分析

この節では、今回調査した宮沢賢治のドイツ語訳作品の分析結果を構文ごとに検討していきたい。

4.1 TRK (S-V-A-RP)

論考執筆者はこれまで他動詞型結果構文を構成する必須の文要素を構文中で満遍なく見渡し、その多様な文法的特性に注目した分析を行ってきたが、今回は特に結果項に注目し、結果項と文の主動詞の関連を中心に考察した。その結果、結果項に生起する要素として、従来から先行研究でも論じられている形容詞句（例文 6a, b）や前置詞句（例文 6c）の他に、少なくともドイツ語では、分離動詞の前綴り（例文 7a, b）や方向成分（例文 7c）も結果項として同様の機能を果たすことが可能であるという結論に至った：

- (6) a. Singend, lachend und lärmend waren sie [= die dreißig Laubfrösche] so am Werke bis zum Abend, wenn die Sonnenstrahlen *das Grün der Bäume und Gräser* dunkelgold färbten. (S. 117/Nr.165, カイロ団長) [ST 1]

夕方は、お日さまの光が木や草の緑を餡色にうきうきさせるまで歌ったり笑ったり叫んだりして仕事をしました。(41 頁 /D)

- b. „... *Alle runden und rundlichen Dinge* sollen wie Eier knacks! kaputtgeschlagen werden!“ [= 例文 2a]

..., まるいものや、まるいようなものは、みんな卵のように、パチンと割ってしまうそうだよ。」

- c. " Was ist los? Ich soll ein Dieb sein! *Die Kerle, die das sagen, die* werde ich alle in Stücke reißen!“ (S. 18/Nr.155, 狼森と策森, 盗森) [ST 1]

「... そう云うやつは、みんなたたき潰してやるぞ。...」(38 頁 /A)

- (7) a. "Oh ja, ich werde für dich *das Feuer* anblasen." (S. 151/Nr.145, オッペルとぞう)

「ああ、吹いてやろう。」(118 頁 /D)

- b. "Was soll das! Willst du mir etwa *mein Bentô* wegfressen!" (S. 107/Nr.162, 猫の事務所)

「何だい。君は僕にこの弁当を喰べろというのかい。」(130 頁 /D)

- c. "Chunse, du darfst *das Gift* aber nicht herunterschlucken! ..." (S. 163/Nr.148, 双子の星)

「チュンセさん。毒を呑んではいけませんよ。」(12 頁 /D)

例文 (6a) は、典型的な ST 1 タイプの用例で、動詞 färben（着色・彩色する）の含意する状態変化

後の最終的な色を形容詞句による結果項、つまりこの例文の場合は形容詞 *dunkelgold* (鉛色) として文中に生起させている。例文 (6b) は、すでに何度か引用しているが、行為の結果状態を示す形容詞句による結果項が文中の主動詞、この例文の場合は過去分詞形と一語で書かれ、複合動詞として扱われている例となる。例文 (6c) は、自動詞型結果構文での例文 (3c) と同様、随意的な前置詞句で表現された結果項 (*in Stücke*) を有する。文の主動詞 *reißen* 「引き裂く」の描写する出来事・事象の結果、対格目的語である「そう云うやつ (*Die Kerle, die das sagen*)」が「全体から切り離された切片や断片の状態 (*in Stücke*)」になっていることを描写している。

形容詞句や前置詞句で生起する結果項に対して、少なくともドイツ語では、さらなる形式での結果項も考慮に入れる必要があると論考執筆者は考えている。例文 (7a) の分離動詞 *anblasen* は「吹いて燃立たせる」ことを意味し、*Duden Universalwörterbuch (s.v.)* では、*durch Blasen anfachen* (息を吹きかけることで煽る) と意味記述されている。例文 (7a) は、火 (*das Feuer*) に息を吹きかける (*blasen*) ことで、その結果、火が煽られ、安定的に着火している状態あるいは燃立たされた状態 (*an*) にあることを示している。これまでの一般的な結果項である形容詞句や前置詞句とは異なり、分離動詞の前綴りである副詞表現で生起する結果項となつてはいるものの、主動詞の表す出来事・事象の結果、対格目的語が最終的に到達する結果状態を表現しているという意味で他動詞型結果構文の特質を十分備えていると判断する。同様のことは、例文 (7b) にも当てはまり、弁当を食べる (*fressen*) 行為を通じて、最終的には弁当が無くなる状態 (*weg*) になったことを表現しているという点で他動詞型結果構文と考えられる²⁶。また、この2例は結果項と主動詞が正書法上の一語で書かれており、「結果状態」と「その結果状態を生み出す行為・動作」が一体化しているという点で例文 (6b) との連続性も窺える。最後の例文 (7c) は、文の主動詞 *herunterschlucken* (飲み込む、嚥下する) が分離動詞であるという点で例文 (7a, b) との連続性は認められるものの、主動詞の表す出来事・事象の結果、飲み込むべき対象である *das Gift* (毒) が最終的に到達する場所や結果状態は当該文中で明示的に言語化されているとは言えない。その意味では、単純に例文 (7c) が他動詞型結果構文の用例であるとは言い難いが、ここで読み取れる状況は、分離前綴りの *herunter* が「上から下への移動」を表す方向成分であるため、口から入った毒は食道を通り、胃を経由して腸に至り、恐らくそこで吸収され体内に入り、悪影響を及ぼすのであろうという一連のイメージであり、その後に当然想定される結末である。分離前綴り *herunter* の中の接頭辞 *her-* の存在が「話者・読者への接近」を表すため、毒を飲み込んでしまったその結果生じるダメージを自分自身の受ける痛手のようにイメージし、捉えることを可能にしている点や、前置詞句で生起する結果項が元来は「変化の結果や終着点を表す方向表現」で表示されている点を併せて考慮すれば、毒の最終到達場所や毒による最終結果状態は当該文中では確かに明示的に言語化されてはいないものの、*herunter* が示す最終結果状態は前後の文脈の中で一定の想定の内にとまり、暗黙のうちに当該の出来事・事象の最終結果状態が思い起こされる。このように方向成分が示唆する、言わば「暗黙の最終結果状態」あるいは「文脈上予期される最終結果状態への指向性」までを含めて広義の結果構文であると仮定すると、結果構文は統語的・意味的な構文を超

え、語用論的な性質を多分に有する構文となるだろう。前後の文脈に依存しつつ、「暗黙の最終結果状態」と結びつくような方向成分を前綴りとして持つ分離動詞までも、拡張された結果構文の一部として捉えることが本当に正当な分析であるかは、今後も検討を継続していく必要があると考えるが、少なくとも結果構文（の一部）に語用論的な性質がある程度認められる点は、以下の用例からも読み取れる：

(8) ²⁷ a. *Er streichelte *die Katze grün*. (Rapp 1997: 107)

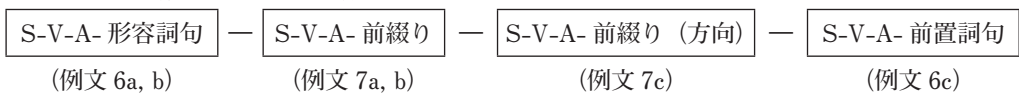
b. “Ich könnte *mich schwarz* ärgern, daß ich gestern abend keinen Dienst hatte”, sagt einer von ihnen [= Köbessen]. (Shima 2010: 9)

c. *sich tot*ärgern (ひどく怒る), *sich tot*lachen (死ぬほど笑う) (マイスター独和辞典：s.v.)

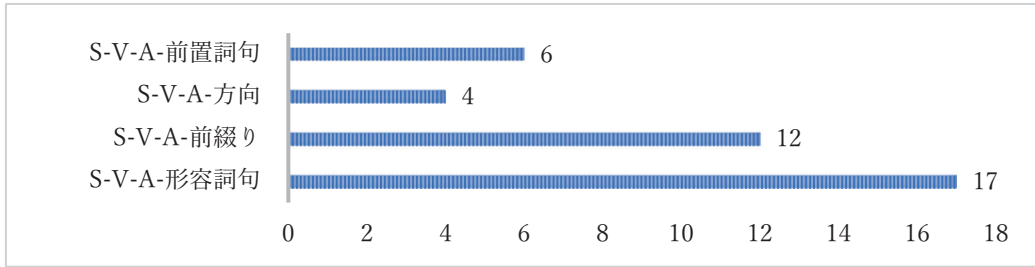
結果構文において、文の主動詞と結果項の間に意味的な制約が存在していることはすでによく知られていることであり、主動詞の表す行為や過程から意味的に導き出せないような結果状態を表す結果項は生起できない。そのため、例文 (8a) では、猫を撫でる行為の結果、猫が必然的に緑色になる状況が現実の世界では不自然であるため容認されていない。しかし、Rapp (1997: 107) は、Marga Reis からの指摘として、緑色のペンキがついた手で猫を撫でる状況を想定した場合、当該文の認容度が増すことを指摘している。このことは結果構文が文レベルでの意味を超えて、語用論的な意味にも影響を受けうることを示唆している。また、例文 (8b, c) では形容詞句による結果項は、主動詞の表す行為や過程の結果、対格目的語が変化する最終結果状態を描写しているのではなく、単に強意・強調のために用いられているだけである。このように結果項の中には字義通りの最終結果状態を描写せず、言わば現実世界の状況に合わせ、語用論的制約に応じて、比喩的・強意的に用いられているものも存在している。

以上より、ここまでの分析と考察をまとめると、今回宮沢賢治のドイツ語訳作品の分析を通じて他動詞型結果構文に生起する結果項と文の主動詞の間には、スケール的な連続体としての性質が読み取れた。具体的には、これまでの先行研究の多くで同定されている形容詞句として生起する結果項と、前置詞句として生起する結果項をスケールのそれぞれの両端とした場合、その中間段階に分離動詞の分離前綴りとして生起する結果項が位置づけられ、全体として1つの他動詞型結果構文を形成していると考えられる：

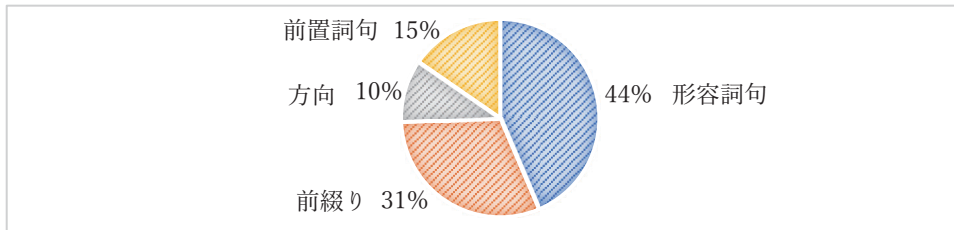
(9) 他動詞型結果構文の結果項の種類



グラフ 3：様々な形式を持つ結果項の生起数 28 (Token)



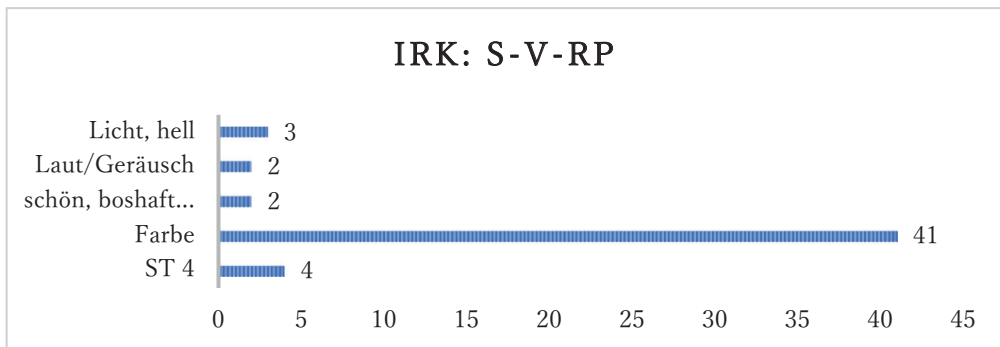
グラフ 4：様々な形式を持つ結果項の生起率 (%)

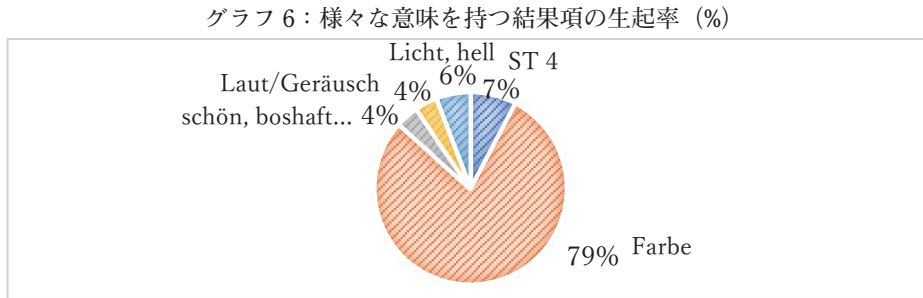


4.2 IRK (S-V- RP)

自動詞型結果構文については、従来型の ST4 よりも結果項が「知覚者の判断結果」として生起する ST5 の用例が多く、その中でも色や光、音といった人間の知覚に深く関係するものが目立つこと、特に色彩表現に関する用例が圧倒的多数を占めたことを 3.2 節ですでに述べ、検討をした。ここでは、その具体的な数値を紹介するに留める：

グラフ 5：様々な意味を持つ結果項の生起数²⁹ (Token)





上記2つのグラフ中の項目のうち、Licht, hell, schön, boshaft, Farbe は、主に視覚領域を通じて認識・認知する外界の情報に属し、聴覚領域に属する Laut / Geräusch の外界情報に比べ、視覚領域の圧倒的な優位性が容易に見て取れる。

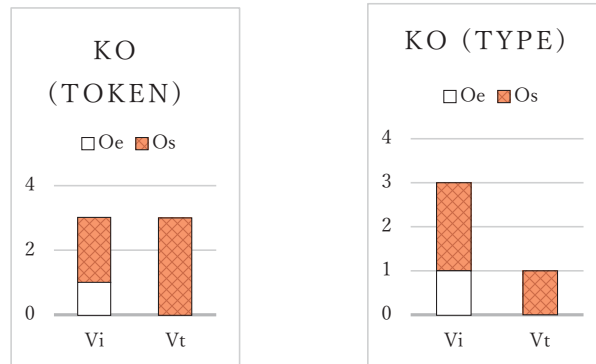
4.3 KO (S - V - KO)

同族目的語構文については、注6で示した通り、研究者により様々な定義がある。論考執筆者は、収集できる用例数に制限があることを考慮して、最も広い同族目的語構文の定義を採用した。具体的には、最も典型的な「自動詞 (Intransitives Verb) の基底動詞 + 同語源の目的語 (Etymologisches Objekt)」に加え、基底動詞の条件には「他動詞 (Transitives Verb)」も含め、対格目的語の条件には「意味的に同系の対格目的語」も加えて調査をしたが、今回の宮沢賢治のドイツ語訳作品の分析では「他動詞の基底動詞 + 同語源の対格目的語」からなる用例は見つからず³⁰、論理的には4種類考えられる実現形式の可能性のうち3種類のみが使用されていたことが判明した：

表 2：宮沢賢治のドイツ語訳作品中の同族目的語の分類

	Intransitives Verb (Vi)	Transitives Verb (Vt)
同語源の目的語 (Etymologisches Objekt: Oe)	S - Vi - Oe	S - Vt - Oe
意味的に同系の目的語 (Semantisches Objekt: Os)	S - Vi - Os	S - Vt - Os

グラフ 7：同族目的語の生起数



今回の調査では収集できた用例が少ないため、決定的なことを主張するには些か時期尚早な感があるものの、調査結果をまとめたグラフ 7からは、狭義の同族目的語である「同語源の対格目的語」は自動詞の基底動詞の時にのみ生起していたことが判明した（例文 10a）。また、同族目的語の生起数をタイプレベルで検討した場合、自動詞の基底動詞が多いことも見て取れる。このことは、「自動詞の基底動詞 + 意味的に同系の対格目的語」の形式も一定程度は使用されていることを意味している（例文 10b）。例文（10b）の基底動詞 *tanzen* に対しては同族名詞 *Tanz* が存在する。また、注 17 で取り上げた Schulz / Griesbach (1960/1972: 220) からの例文にもあるとおり、*Tanz - tanzen* の組み合わせは多くの先行研究でも言及されている。それにも関わらず、例文（10b）では *Tanz* の下位概念の 1 つである *Ringelreihen*（手をつないで輪になって踊る子供の遊戯、『マイスター独和辞典』: *s.v.*）が意味的に関連する広義の同族目的語として生起している。また、例文（10c）に見られるように、日常的には他動詞 *singen* の対格目的語に同系の *Gesang* が用いられるよりも *Lied* が好んで選択されることは、語彙選択の余地がある場合、純粋な語義の問題に加えて、文体上の制約が反映されている可能性が高いと考えられる。

- (10) a. [S - Vi - Oe] In den Wipfeln, die schwarz und schlüpfrig waren wie Riemen-Tang, träumte das Kanonenboot mit der schönen Stimme nacheinander verschiedene Träume: ... [= 例文 4]
その昆布のような黒いなめらかな梢の中では、あの若い声のいい砲艦が、次から次へといろいろな夢を見ているのでした。
- b. [S - Vi - Os] Rundherum tanzten neun Wölfe einen wilden Ringelreihen. (S. 14/Nr.81, 狼森と策森, 盗森)
(... 燃えていて,) 狼が九疋, くるくるくるくる, 火のまわりを踊ってかけ歩いているのでした。
(32 頁/A)
- c. [S - Vt - Os] Aber der Orion sang sein kriegerisches Lied weiter und nahm von dem Nachtfalken überhaupt keine Notiz. (S. 212/Nr.86, よだかの星)

オリオンは勇ましい歌をつづけながらよだかなどはてんで相手にしませんでした。(37頁/D)

同族目的語は、注17からも読み取れる通り、動詞が描写する行為や過程が生じた結果、初めて生起するという意味で「被成目的語 (effiziertes Objekt)」である³¹と同時に、動詞の表わす出来事・事象をより豊かに、より具体的に描写していると考えられる。このことは、つまり話者が自身の感覚器官を通じて当該の出来事・事象をどのように理解し、把握したかを明示的に言語化して示す、言わば主観的な表現であり、特定の感覚・知覚領域と密接な関連性を有しながら、出来事・事象を具象化・具体化するという重要な構文的機能を有していることを意味する。

同族目的語構文に関して、論考執筆者が現在考えている課題は、用例の充実に加えて、表2で示した変種間の関係を解明することである。現時点で論考執筆者は自動詞を基底動詞とする同族目的語構文については、Grimm/Grimm (1935/1984: 2418) によるドイツ語辞典の動詞 sterben についての記述³²の中に見られた「古高ドイツ語の道具格に由来」という点に依拠して、最も狭義の同族目的語構文 (S - Vi - Oe) は S - Vi - OBL (斜格) の構造から生み出されたと仮定している。そして、一度 S - Vi - Oe の構造がドイツ語文法の中で定着すれば、同一の文中に同語源の動詞と対格名詞が近接して生起する状況は、文体論上の必要から同語源の語をほぼ同義で、形態論的にも十分異なった他の語に置き換えて文体を是正³³しようとしたことは容易に想定でき、このプロセスを経て、対格目的語を同義の別の名詞に置き換えた S - Vi - Os の形式が誕生したと考えている。問題となるのは、他動詞を基底動詞とする同族目的語構文で、自動詞による同族目的語構文の場合からの類推で S - Vt - Oe の形式から S - Vt - Os の形式が生み出される可能性は十分考えられるものの、今回の調査に使用した宮沢賢治のドイツ語訳作品の中には S - Vt - Oe の形式の用例は見つからず、自動詞による同族目的語構文の場合との相違が一層際立つ仮説となる。なお、論理的には逆方向の可能性を考慮することもできるが、自動詞を基底動詞とする同族目的語構文とは正反対の派生方向を支持する根拠は現時点では見つかっておらず、また S - Vt - Os の形式は、文の主動詞と対格目的語のとの間に意味的な関連はあるものの、形態的には互いに異なるという、言わば通常の S - Vt - O の形式と類似のものであり、この形式からより有標の対格目的語が同語源の名詞に置き換わる要因も見つからない。表2で示した同族目的語構文の変種間の関係についての現時点での暫定的な結論は、結局以下のようにまとめることになる：

(11) 同族目的語構文の変種間の関係

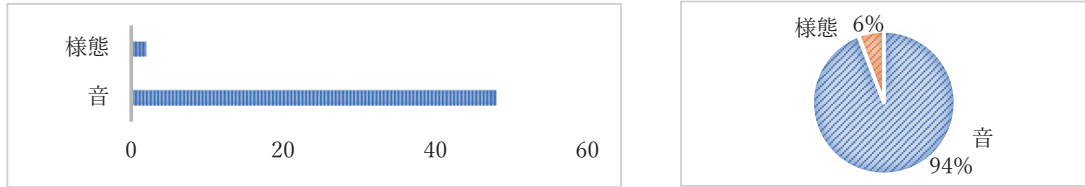
$$\begin{array}{ccccccc} (S - Vi - OBL & \rightarrow) & S - Vi - Oe & \rightarrow & S - Vi - Os \\ & & S - Vt - Oe & \leftarrow ? \rightarrow & S - Vt - Os (= S - Vt - O) \end{array}$$

4.4 ONOM

オノマトペ構文については、音に関する表現の用例が圧倒的多数を占めた (3.4節参照)。その具体

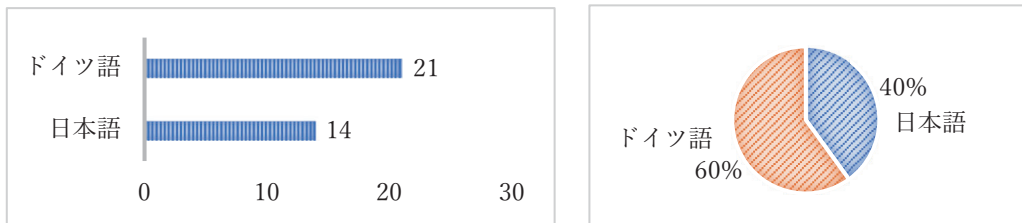
的な数値をまず紹介する：

グラフ 8：オノマトペの「種類」(Type)



次に、人間の聴覚領域と深く関係しているオノマトペ表現がドイツ語への翻訳の際にどのように言語化されているのかを調査するために、ドイツ語の翻訳に登場するオノマトペ表現をその由来に注目して「日本語のオノマトペ表現に由来しているもの (=音転写・転用)」か、「ドイツ語本来の表現から来ているもの」か、を調べてみた：

グラフ 9：オノマトペの「由来」(Type)



論考執筆者の予測とは裏腹の調査結果が判明したことは 3.4 節ですでに述べた通りだが、このことは、宮沢賢治の駆使した独特のオノマトペ表現はオノマトペ表現が豊かな日本語の中でも一際目を引くものであり、「音転写・転用」によって日本語の音をそのままドイツ語で使ったとしても、宮沢賢治の意図した状況や情景が読者に伝わりにくいと翻訳者が判断したからではないかと考えられる。実際、「音転写・転用」によって日本語の音をそのままドイツ語で使った場合、ドイツ語話者にはそのオノマトペが想起させる場面を思い浮かべることは困難で、文中の「音転写・転用」によるオノマトペ以外の部分で宮沢賢治の意図した状況や情景を描写・説明する必要が生じる。第 1 節で挙げた例文 (1c) のように、例えば、以下の例文 (12a) の 1 行目でも、宮沢賢治の原文が「音転写・転用」により、ドイツ語へと変換されているが、日本語を知らないドイツ語話者には zaazaa zazza-zazazaaa のオノマトペ部分は理解が難しく、このオノマトペだけでは、「雨 (der Regen)」の状況を正しくイメージできないであろう。そこで、翻訳者は動詞 rauschen を加えて、主語である「雨」が生み出している「一定の間隔で持続的な鈍い (騒・雑) 音」³⁴ の存在にドイツ語読者の注意を向け、ドイツ語訳を読む読者にその具体的な実現形が原文では zaazaa zazza-zazazaaa であることを説明的に理解させようと試みている。2 行目以降も同様に、日本語からの「音転写・転用」によるオノマトペをドイツ語

訳に生起させた場合は、いずれも日本語のオノマトペが喚起するイメージや状況を正しく把握できるような文の主動詞が想定されるイメージを補完している³⁵。ドイツ語の動詞がその語義の一部として内在的に有する意味情報を文中で語として具現化させる、それも主語である「雨」が生み出す「音」を知覚した結果の言語化であるという点で、この *zaazaa zazza-zazazazaa* というオノマトペの実現形は、自動詞型結果構文中の結果項と極めて似た機能を果たしていると言える。自動詞型結果構文中での結果項が形容詞句として生起する一方で、オノマトペ表現の実現形は副詞類であるため、例文 (12a) を自動詞型結果構文の例文とは分類しないものの、当該文肢が構文中で果たしている機能は基本的には同一のもので、両構文間の緊密な関連が見て取れる。同様のことは例文 (12b) にも当てはまる。使役構文の補文中に生起している動詞 *knallen* は、ここでは革鞭 (*Peitsche*) が生み出す激しい音をその語義に内包する動詞であるが、例文 (12b) 中では実際にドイツ語のオノマトペである *hui-wipp* が生起している。この表現はドイツ語の *Peitsche* が産出する典型的な音であり、原文の「ひゅうぱちっ、ひゅう、ぱちっ」からの「音転写・転用」によるオノマトペではない。例文 (12b) でも例文 (12a) と同様にドイツ語の動詞が語義として有する「音に関する意味情報」を知覚の結果として文中で具体的に顕在化させているという点で自動詞型結果構文中の結果項と類似の機能を果たしている。

(12) a. “Der Regen rauscht zaazaa zazza-zazazazaa,

Der Wind heult doodoo doddo-dodododoo,

Der Hagel prasselt parapara paraparattataa,

Der Regen rauscht zaazaa zazza-zazazazaa.” (S. 53/Nr. 96, かしわばやしの夜)

「雨はざあざあ ざっざざざざあ

風はどうどう どっどどどどどう

あらればらばらばらったあ

雨はざあざあ ざっざざざざあ」(114 頁/A)

b. Der Kutscher ließ hui-wipp zwei-, dreimal die Peitsche knallen. (S. 62/103, どんぐりと山猫)

別当がこんどは、革鞭を二三べん、ひゅうぱちっ、ひゅう、ぱちっとう鳴らしました。(19 頁

/A)

オノマトペが「外界 (の音) を知覚した知覚者が文中でその知覚内容を主観的に言語化して再現させたものである」とすれば、そのオノマトペの生起環境は自動詞型結果構文にのみ限定されることはなく、他動詞型結果構文の環境の中に生起するオノマトペも当然考えられる。例文 (13a) で他動詞 *läuten* ((鐘を) 鳴らす) の文中に生起しているオノマトペ *klingling* は、ドイツ語話者が鐘の音を知覚した際に思い描く典型的なオノマトペの1つではあるものの (注 22 も参照)、通常の生起語順、つまり一般的には変化の結果に意味の焦点が当たるため結果項は文末要素になる点や、形容詞句や前置詞句といった生起形態ではない点等から、当該のオノマトペが結果項として他動詞型結果構文中に

生起したとまでは言えないが³⁶、これまでの議論を踏まえれば、このオノマトペと他動詞型結果構文との間に十分すぎる関連性が見て取れよう。さらに、例文(13b)は、本論稿でも度々取り上げた例文であるが、他動詞型結果構文中にさらに付加された要素であるオノマトペknacks!によって、知覚者の知覚内容が言語的に再現され、他動詞型結果構文の描写する出来事・事象の臨場感をより高めていると言える。

- (13) a. Jetzt läutete der Kutscher klingling die Glocke. (S. 62/Nr.101, どんぐりと山猫)
 馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんがらんがらんと振りました。(19頁/A)
 The coachman rang his bell. Clang, clang! it went. (33頁/Bester 1996)
- b. „... *Alle runden und rundlichen Dinge* sollen wie Eier knacks! kaputtgeschlagen werden!“ [= 例文 2a]
 …, まるいものや、まるいようなものは、みんな卵のように、パチンと割ってしまうそうだよ。]

最後に、ドイツ語本来のオノマトペ表現として、原文からの音の「転写・転用」による翻訳でもなく、ドイツ語動詞に内在するオノマトペ的要素を文中に取り出して具象化する翻訳でもない第3の方法として、第1節の例文(1b)のように、すでにオノマトペ要素が語彙化されている動詞をそのまま用いる方法が宮沢賢治のドイツ語訳の中にも見つかった³⁷：

- (14) Die Elefanten erhoben sich wie ein Mann und begannen, aufgeregt durcheinander zu trompeten. (S. 153/Nr. 129, オッペルとぞう)
 象は一せいに立ち上がり、真っ黒になって吠えだした。(120頁/D)
 Rousing themselves, the herd gathered together and began trumpeting till they were purple in the face. (111, 113/Bester 1996)

宮沢賢治のドイツ語訳の分析を通じて、ドイツ語本来のオノマトペが予想以上に多く使用されていることが判明したと同時に、オノマトペ構文では聴覚領域の優位性が際立っていること、そして何よりも本論考で検討している結果構文や同族目的語構文といった他の構文との機能的な関連性、類似性、あるいは連続性が認められることが確認できた。

5. まとめと展望

論考執筆者は、今回の調査を通じて検討してきた4種類3構文間の新たな関連性に加えて、各構文が人間の持つ五感とそれぞれ密接に関係していることを突き止めた。その際、特に重要なことは、目(視覚)・耳(聴覚)・鼻(嗅覚)・舌(味覚)・皮膚(触覚)の5つの感覚器官を通じて知覚していく外界の情報は、5つの領域の全てから同時に均等に入ってくるというわけでもなければ、各構文が特

に密接な関係を持つ領域が全て同一というわけでもないという点である。例えば、他動詞型・自動詞型の結果構文 (TRK / IRK) では対格目的語や主語の結果状態を認知する際に最も効果的に活用されるのは、典型的には視覚領域であると考えられる³⁸。同族目的語構文 (KO) では、本来的には「動詞表現による事象の動的な把握・認知」から「名詞表現による事象の静的な把握・認知」への変換が生じており、動詞群の意味内容に応じて様々な感覚領域が駆使されることになる。図2の意味地図で示した動詞群との関連で考察すれば、「知覚動詞 (perception verbs)」は、その名の通り、人間の感覚器官を使って外界からの情報を獲得するもので、ドイツ語では味覚領域、嗅覚領域そして触覚領域に属する動詞群が挙げられる³⁹。さらに、「移動動詞 (motion verbs)」、「活動動詞 (action verbs)」、「生理動詞 (physiological verbs)」等では典型的には視覚領域が最も効果的に活用されると考えられるのに対し、「放出動詞 (emission verbs)」の中でも「音放出動詞 (sound-emission verbs)」の場合は聴覚領域が、「光放出動詞 (light-emission verbs)」の場合は視覚領域が特に優位になると考えられる。最後に、オノマトペ構文は、グラフ8から読み取れる通り、圧倒的に聴覚領域が優勢であった。このように考えていくと、今回の論考で扱った4種類3構文と人間の持つ感覚領域との関係は、概ね以下の表のようにまとめることができるのではないだろうか：

表3：構文と感覚領域の関係⁴⁰

	視覚領域	聴覚領域	嗅覚領域	味覚領域	触覚領域
結果構文	+++	++	?	+	+
同族目的語	+++	++	+	+	+
オノマトペ	+	+++	?	?	?

このように考えていくと、一方では、それぞれの構文には最も相性の良い感覚領域が存在することが読み取れる。結果構文と同族目的語構文における視覚領域、オノマトペを含む構文における聴覚領域である。別の言い方を使えば、各構文には自らの持つ意味を最も効果的に表現することのできる感覚領域が存在し、その感覚領域を中心に他の近接する感覚領域に表現の可能性を拡張しているとまとめることもできよう。また、他方では、今回の4種類3構文は、いずれも視覚領域あるいは聴覚領域を通じて知覚者が把握した外界の状況を発信する構文であるとまとめることができる。この時の「知覚者が把握した外界の状況」とは、文の主動詞が全く新たに生み出す状況である場合もあるが、主動詞が内在的に有している語義の一部を文中に取り出して、具体的に言語化・具象化する場合もある。Talmy (1985, 2000) による「語彙化のパターン (Lexicalization patterns)」の研究が、ある言語の動詞語義の中にどのような要素が意味的に組み込まれているのかを分析・解明したものであるとすれば、今回の4種類3構文は、まさにその逆方向のプロセスを示しており、ある言語 (今回の調査ではドイツ語) の動詞の中に語彙化され、組み込まれている意味要素を文中に取り出し、具体的に再言語化することでより詳細で、具象的な出来事・事象を記述するプロセスと見なすことができると論考執

筆者は考えている。これら4種類3構文が共通して有する「語彙化」の正反対のプロセスは、どのような名称で表すのが最もその本質を反映させることができるのか、今後も慎重な検討が必要であろうが、現時点では論考執筆者は、個別化 (Individualisierung) / 具現化 (Realisierung) / 具体化 (Verkörperung) / 具象化 (Verdinglichung) / 可視化 (Visualisierung) / 言語化 (Verbalisierung) / 実体化 (Materialisation) などとイメージしている。

最後に、今回の分析結果を論考執筆者が現在取り組んでいる「構文ネットワーク」に反映させると、Shima (2021: 40) で提案した構文ネットワークの図は以下の図3のように更新できる：

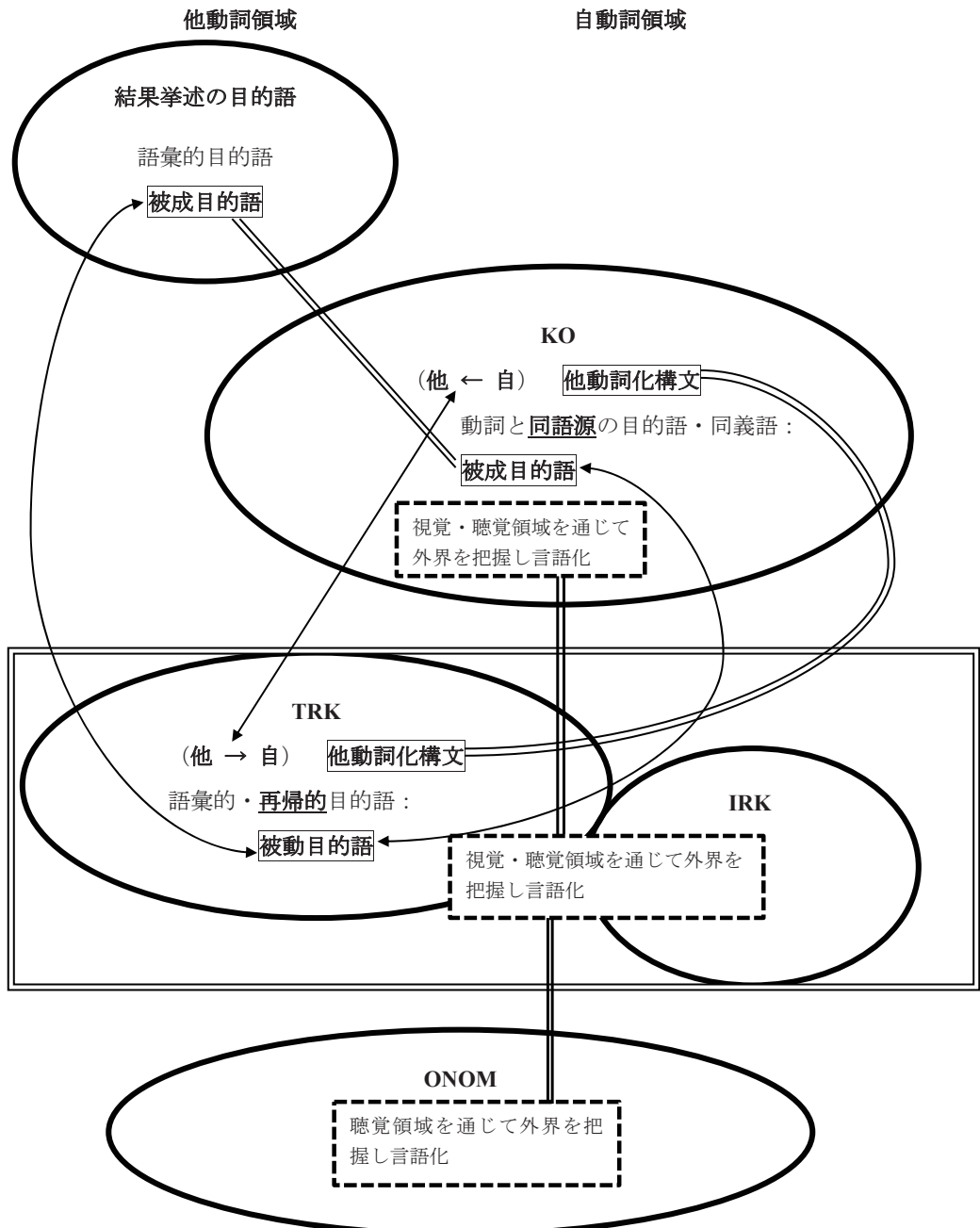


図3：構文ネットワーク

今回の論考では直接触れなかったが、出現や消失といった目的語全体に関わる意味を表す高い他動性を示す動詞と共に生起する被成目的語を頂点に、同族目的語構文、結果構文、オノマトペ構文の順で配置させると、同族目的語構文と他動詞型結果構文は他動詞化の構文パターンを持ち、基底動詞が

他動詞・自動詞の両領域に存在する⁴¹。また、同族目的語は動詞の表す行為によって始めて生成されるという点で被成目的語であるのに対し、他動詞型結果構文に生起する対格目的語は被動目的語である。自動詞型結果構文は、再帰的目的語を有する他動詞型結果構文と関連し、構文中に生起するオノマトペは文の必須文肢ではないため他動性とは直接の関連を持たない。

図3では、構文のより基本的・典型的な形式からより非典型的な拡張形式への方向を丸括弧内に表示し、その際に機能する他動詞化あるいは自動詞化のメカニズムを四角で囲ってある。また、構文間で見られる同種の項目や機能は二重線で結び、対立項目同士は矢印で表した。ここからさらに読み取れることは、対格目的語を有する構文の場合、その対格目的語の実現形式には、語彙形式で生起する結果挙述の目的語を頂点に、下に向かうにつれ次第に形式的な条件が付け加わっていくことである。同族目的語構文の場合は、動詞と意味的に関連する対格目的語の場合は通常の語彙形式であるものの、狭義の同族目的語では動詞と同語源の語彙形式という制限がかかる。他動詞型結果構文では、より基本的なサブタイプの場合は語彙形式の対格目的語が生起するが、拡張が進んだ ST 3b と ST 2b では再帰形に固定される。

今後は、今回の成果をさらに検証していく一方で、文の実質的な意味を動詞派生の名詞句が担う機能動詞結合 (Fuinktionsverbgefüge) の構文分析を計画している。

注

- 1 本論考は、2021年9月18日にWeb開催された京都ドイツ語学研究会第104回例会での口頭発表（「宮沢賢治のドイツ語訳テキストに生起するドイツ語構文の機能的役割：結果構文と同族目的語構文を中心に」と、同年11月24日に京都産業大学ことばの科学研究センターで開催された第5回研究会での発表（「構文の機能的役割：宮沢賢治のドイツ語訳テキストを手がかりに」）に基づき、その内容を発展・拡充させたものである。2つの会では活発な議論や質問を通じて、新しい知見や多くの学術的刺激を得ることができた。ここに記して発表の際にいただいた多数の貴重なコメントや有意義な指摘の数々に心より感謝の意を表したい。中には今後もさらに検討を要する問題も残っているものの、論考執筆者との議論を辛抱強く続けてくれた島令子氏にも改めてここで感謝したい。最後に、京都での研究会を通じて論考執筆者の知的好奇心を常に刺激して下さった西本美彦教授（†2022年3月8日）に心からの感謝とともに今回のこの小論を捧げたい。
- 2 論考執筆者には、夏目漱石の「ちゃらちゃら」というオノマトペは些か不慣れで、むしろドイツ語表現の方が鈴の音色をイメージしやすい。恐らくそれは、日本語がドイツ語以上にオノマトペが豊かで自由な言語であること、そしてドイツ語では動詞 *klingeln* が想起させる音のイメージがある程度限られており、典型的には軽やかで音域上の高い音と結びついていることなどが主な理由になるのではないと思われる。
- 3 Duden Deutsches Universalwörterbuch (2003) によれば、*mauzen* (*s.v.*) はさらに「*mauzen* の鼻音化された形式 (nasalisierte Form von *mauzen*) で、日常語的 (ugs.)」と記載されている。また、*mauzen* (*s.v.*) は「現在の *miauen* の古い形である *mauen* からの継承形 (Weiterbildung vom älterem *mauen* = *miauen*, ...)」とされ、*miauen* (*s.v.*) は「(猫が)「ニャー」と響くような音を発すること ((von Katzen) einen wie “miau” klingenden Laut von sich geben)」と記されている。
- 4 ドイツ語の文法研究では、伝統的に「内在的目的語 (Inneres Objekt)」の術語が使われてきた。
- 5 動詞の表す行為や過程を通じて、結果項で示されるような結果状態に変化する要素は、他動詞型の文では対

格目的語であり、自動詞型の文では主語としてコードされる。

- 6 同語源の対格目的語の他に「意味的に同系の対格目的語」も加える場合や、基底動詞に他動詞を含める立場もあるなど、同族目的語の定義は学者により異なる。詳細は Naruse-Shima / Shima (2013) を参照。
- 7 表 1 での表記法を本論考でも引き継ぎ、結果項には下線をつけ、結果項で示されるような結果状態に変化する要素（対格目的語あるいは主語）はイタリック体で示す。
- 8 例文の末尾にある情報は、ドイツ語での例文の場合は「ドイツ語訳中の掲載頁／論考執筆者による整理番号、出典作品名、サブタイプ分類」を意味し、原典からの引用例文の場合は「掲載頁／出典作品の収録された書籍記号」を表している。
- 9 先行研究では、分離動詞と結果項は結びつかないと主張される（例えば、Staudinger 1997）が、この例文はその反例となる。
- 10 この系列に関して、論考執筆者は以下のように主張した（Shima 2021: 32）：
ST 3b - ST 2b の系列では、ST 3a の持つ「動詞が対格目的語に課す選択制限の変化」や「対格目的語と結果項との間の叙述関係の前掲化」を引き継ぎつつ、主語と主語が働きかけを行う対象である対格目的語との境界が希薄化・形式化していく。統語的には主語と対格目的語にそれぞれ格表示されてはいるものの、生起する対格目的語が再帰形に限定されることから意味的には対格目的語と主語との同一性を保証し、対格目的語と形容詞から成る 2 次的叙述関係は間接的・結果的に主語の結果状態を描写することになる。もともと動詞が対格目的語に課す選択制限が変化していることに加えて、ST 3a の場合と同様、ST 3b の動詞群も自他両用法を持つため、動詞と対格目的語との間の統語的な結びつきは他動詞を基底動詞とする ST 1 の場合より緩やかになっているとも言え、最終的には自動詞を基底動詞とする次の ST 2b へと繋がっていきと考えられる。言い換えれば、他動詞型結果構文の形式的枠組みは系列全体で踏襲しながらも、まず動詞と対格目的語の間に存在していた選択制限に生じた変化のため両者の意味的な断絶が生まれ、次第に動詞の持つ自動詞的用法に焦点が移っていく。加えて、対格目的語と結果項の叙述関係の中で、再帰形として生起する対格目的語は、自動詞文同様、実質的な文の参与者が主語で示される対象のみであることを表すため、統語形式上は他動詞型の構文を保持しながらも、意味的には主語で示される対象の行為とその結果状態を描写する、限りなく自動詞文に近い表現になっていると解釈することが可能となり、最終的には基底動詞を自動詞とする ST 2b の用法へと結びついていくと考えられる。
- 11 ST 2b から ST 4 に伸びる矢印が図 1 で他の矢印と異なっているのは、統語的な実現形に注目した際、sich の消失は適切に説明されなければならない大きな文法的変化であるためである。この点については、引き続き慎重な検討が必要であるが、*duschen*（シャワーを浴びる）のような動詞は自動詞として単独で用いることも、*sich duschen* といった再帰動詞の形式でも用いられることなどと関連づけて説明することが可能ではないかと考えている。
- 12 「人間の知覚や五感に深く関係する」という捉え方は、自動詞型結果構文の結果項のみならず、同族目的語の持つ構文的機能にも見て取れる。この点は、独英両言語での同族目的語構文を比較分析した成果をまとめた意味地図 (semantic map) からも読み取れる。詳細は本論考の 3.3 節、および Naruse-Shima / Shima (2013) を参照。
- 13 京都産業大学ことばの科学研究センターでの発表では、比較対照の際の参考情報として英訳も合わせて引用した。まだ包括的・網羅的な調査ではないため、入手できた例文のみの掲載となっている。
- 14 Duden Universalwörterbuch (2003: s.v.) には、”[ohne helle Flamme] rot leuchtend brennen, rot vor Hitze leuchten” と記載されている。
- 15 色彩語として生起している結果項が、知覚者の感覚や判断の結果として言語化されるのであれば、その結果項が担う意味は視覚領域に限定されることはないかと予測される。実際、主観的に知覚された結果状態を描写

- する結果構文の例文は、聴覚領域でも確認されている（島 2019 等も参照）。
- 16 ドイツ語と英語の同族目的語表現を比較すると、五感のうちドイツ語では「視覚」に関する動詞が、英語では「味覚」に関連する動詞が欠けていることが判明した。当該の動詞が本質的に同族目的語を取りえない動詞であるかは、その理由づけも含めて今後更なる調査と検討が必要であると考えている。
- 17 この点について、論考執筆者は具体的に Schulz / Griesbach (1960/1972: 220) の例文 *Du hast einen temperamentvollen Tanz getanzt.* を用いて以下の主張を行なった（島 2019a: 35 参照）：
 例えば、..., 文の主語である du の踊りを実際に目の当たりにした話者が、自身の目で見て感じ取ったものを temperamentvoll と把握し、そのように言語化したために、本来ならば踊るという行為そのものは、その存在が長く眼前に残ることもなく、時の経過とともに消失していくはずの一過的な一連の身体の動きであったにもかかわらず、その一連の行為に一定のまとまりと形を主観的に当てはめ、einen temperamentvollen Tanz という名詞句表現を生み出すことを可能にしたとは考えられないだろうか。このように考えると、Du hast temperamentvoll getanzt と表現できるにもかかわらず、敢えて Du hast einen temperamentvollen Tanz getanzt と表現する必要性も自ずと理解できるように思われる。すなわち、話者にとって重要なのは、様態の副詞句で表現される動詞的把握（踊った、それも情熱的に）ではなく、内在的目的語で表現される名詞的把握（踊りが踊られた、それも情熱的な踊りが）であり、日常的なコミュニケーションのレベルではその意味の差は必ずしも大きくはないかも知れないが、話者が出来事をどのように把握し、言語化するかという認知レベルでは大きな差が見てとれると考える。
- 18 例えば、schlecht / unruhig träumen (酷い / 不安な夢を見る), sie hat von ihrem Vater geträumt (彼女は自分の父親の夢を見た), [schlaf gut und] träum süß! ([ぐっすり寝て] 良い夢を!) が前者の例で, etwas Schreckliches träumen (夢の中でゾッとするような体験をする), er träumte, er sei in einem fernen Land (彼は、自分が遠い国にいる夢を見た) が後者の例となる (Duden Universalwörterbuch: s.v.)。
- 19 コーパスによるドイツ語調査では複数形で生起する同族目的語も確認できるものの、先行研究での分析では、多くの場合、単数形であることを暗黙の了解にしているか、単複に関しては不問に付されている。
- 20 例えば, einen schlimmen Traum träumen (悪い夢を見る) などを参照 (戸川敬一他編『マイスター独和辞典』1412 頁の träumen の例文より引用)。
- 21 Porzig (1950/1971⁵: 20-23 ; イタリアックは原文のままだが、下線は論考筆者による)：
 ... ein Wort ist zunächst ein Lautgebilde, und ein großer Teil der Dinge in der Welt sind Töne oder fallen uns durch die Töne auf, die sie hervorbringen. So ist es möglich, die Welt der Töne durch die Laute der Sprache nachzubilden. Und in allen Sprachen der Welt ist diese Möglichkeit in einem gewissen Umfang verwirklicht. Wir haben im Deutschen den Vogel, der seinen Namen ruft, ja der eigentlich für unsere Wahrnehmung nichts ist als dieser sein Ruf: *Kuckuck*. ... Aber auch Lebloses tönt: es *rasselt, klappert, quietscht, plätschert*. Das sind nicht etwa Überbleibsel aus vorgeschichtlichen Zeiten der Sprache, sondern die meisten dieser Wörter – sie ließen sich leicht vermehren – sind jungen Ursprungs. ... So haben wir bei dem Reiz des zuckenden Lichtes und bei der Reizung des Tastsinns durch rasch wiederholte leichte Berührung gleichzeitig Gehörseindrücke, die eben Wörter wie flirren und kribbeln wiederzugeben suchen. Es besteht hier eine Möglichkeit, auch andere Erscheinungen als Töne in die Laute der Sprache zu übertragen. Wir sprechen deshalb von Lautübertragungen.
- 22 ただし、同一の音でも言語によって異なって把握されることはよく知られている：鶏の鳴き声は（標準）ドイツ語では kikeriki, スイスドイツ語では güggerügü, 英語では cock-a-doodle-doo, フランス語では cocorico, ロシア語では kukareku と把握されている (Bußmann 2002: 484)。
- 23 収集した 894 種のうち、400 種は習慣的なもの (usuelle Onomatopoeica) であるのに対し、残りの 494 種

- は一過性のもの (okkasionelle) であるという (乙政 2009: 55, 326f., 367)。
- 24 『マイスター独和辞典』786 頁の knacks の意味記述より引用。
- 25 論考執筆者には、例文 (5b) に登場するオノマトペは日本語でもドイツ語でもかなり個性的なものであるように感じられる。日本語の「どってこどってこ」からは、きのこの楽団が小振りのドラムや太鼓を懸命に叩いているような情景が浮かぶ一方で、ドイツ語の bim, bim, bim は、第一義的には、鐘 (Glocken) の高く冴えた音がイメージされる。英訳の tiddley-tum-tum, tiddley-tum-tum も、どちらかといえば、ドラムや太鼓を連想させられると思われるが、原文に比べると些か軽快な響きに聞こえる。
- 26 より正確には、「他動詞型結果構文からの拡張型」と呼ぶ方が的確かもしれない。
- 27 例文の私訳は以下の通り：(8a) 彼は猫を撫でて緑色にした、(8b) 「自分なら昨晚勤務がなかったことにカンカンに腹を立てるだろうな」と給仕の一人は語っている。
- 28 グラフ中の用語の意味は以下の通り：PP (前置詞句)、DIR (方向成分)、Partikel (分離前綴り)、PV (分離動詞)、ADJ (形容詞)。
- 29 グラフ中の用語の意味は以下の通り：Licht (光)、hell (明るい)、Laut / Geräusch (音)、schön (美しい)、boshaft (意地悪な)、Farbe (色)。なお、用語は Licht / hell を「明暗」、schön / boshaft を「容貌・様子」などと再整理することもできるかもしれない。
- 30 この形式が好んで用いられない理由には、もともと対格目的語を支配する能力を有する他動詞がわざわざ同語源の目的語を支配する場合、仮に付加的な情報を同語源の目的語に与えたとしても、目を引くような新規な表現にはなりにくい上、表現全体の情報量も制限されることが考えられる。本来であれば、対格名詞とは生起できない自動詞とともに生起した対格目的語は、それが同系のものであれ、意味的に関連しているものであれ、他動詞とともに生起した対格目的語と比べれば、目を引き付ける意外性や新規性は格段に高くなると思われる。その一方で、「他動詞の基底動詞 + 同語源の目的語」の用例が全く無いわけではなく、例えば、DWDS (2005: s.v.) からは、Hebt mich auf den Tisch, denn ich will eine Rede reden, die der Rede wert ist. といった用例が見つかっている。
- 31 これに対し、他動詞型結果構文中の対格目的語は、動詞が描写する行為や過程によって影響を受ける対象を示す「被動目的語 (affiziertes Objekt)」である。
- 32 Grimm/Grimm (1935/1984: 2418) のドイツ語辞典によれば、動詞 *sterben* は対格名詞の Tod と結びつくだけでなく、属格として生起した Todes と結びつくことがあり、この用法は元来古高ドイツ語の道具格に由来するもので、今日では *todes* と *hungers* のみが一般的であるという。同様に、DGWDS (2005) の *sterben* の項目には、属格表現は格調高い表現 (gehoben) で、日常的には副詞類か前置詞句で表現されるという記述が見られる。
- 33 この「是正」について、留意すべきことは、論理的には2種類の可能性が想定される点である。つまり、対格目的語をほぼ同義の別の名詞に置き換える場合 (S - Vi - Os の誕生) と、動詞を別の動詞に置き換える場合である。コーパスによる同族目的語の調査をした際、例えば、本来的には十分想定されうる組み合わせである *Leben - leben* はほとんど用例を見つけることができなかった。現代ドイツ語では、*Leben - führen* の組み合わせがほぼ固定されていると考えられるからであり、まさにこの部分が同族目的語構文と機能動詞結合 (Funktionsverbgefüge) の構文との重要な接点の1つであると論考執筆者は考えている。
- 34 “ein gleichmäßiges, anhaltendes dumpfes Geräusch hören lassen (wie das Laub von Bäumen, wenn es sich im Wind stark bewegt)” (Duden Universalwörterbuch : s.v.)
- 35 『マイスター独和辞典』(s.v.) によれば、2行目の動詞 *heulen* は元来「(犬などが) 遠吠えする」ことを意味する動詞であるが、ここでは転義的に「(風などが) うなる、びゅうびゅう吹く」ことを意味し、3行目の *prasseln* は「(雨が屋根などに) 当たってばらばら [ばちばち] 音を立てる、(豆が床などに) 落ちてばらばら

- ら [ばちばち] 音を立てる」ことを表している。
- 36 仮に例文 (13a) を他動詞型結果構文と見做した場合、結果項に相当するオノマトペ *klingling* は、当該文中での必須文肢ではないため、ST 1 のサブタイプに分類されることになるだろう。
- 37 例文 (14) に生起する動詞 *trompeten* は、元来は「トランペットやラッパを吹く」ことを意味する動詞であるが、転義的に「(象が) ぶおうとほえる」(『マイスター独和辞典』: *s.v.*) ことも意味する。辞書の記述にあるように、「ぶおう」等のオノマトペ表現を用いて知覚者による「象の吠え声」の言語による再現は可能であるはずにもかかわらず、原典にもドイツ語訳にもオノマトペ表現は出現していない。猫や犬と比べて、それだけ象は人間にとって身近な動物とは言えず、吠える時の声もそれだけ馴染みがないということなのかもしれない。あるいは、日常的にも聞く機会のあるトランペットの音が象の声と同じであると知覚されるため、そもそもオノマトペが必要ないのかもしれない。
- 38 結果構文においても他の感覚領域が関与していないわけではない。例えば、表 1 に挙げた他動詞型結果構文の例文④は味覚・触覚領域が優勢であり、例文⑤では聴覚領域が優勢であると考えられる。同様に、見つかった例文は少なかったものの、以下の例文は自動詞型結果構文でも聴覚領域が優勢であるものと考えられる：
Die Stimme aus dem Schneckenhaus-Megaphon klang ganz hell herüber: ... (S. 128/Nr. 31, カイロ団長)
かたつむりの吹くメガホーンの声はいともほがらかにひびきわたりました。(54 頁/D)
- 39 ドイツ語の知覚動詞の中では、視覚領域に関する動詞が同族目的語との共起関係にないことは注 16 でも述べたが、この点は、外界の状況を同族目的語の形式で名詞的に (、すなわち静的に) 把握する場合、多くは視覚領域を通じて把握されることと関係があるのかもしれない。
- 40 表中で「+」の数は、その感覚領域の優位性の高さを示す。また、「?」は用例が見つかっていないため判断を保留したことを表している。今後の調査がさらに必要な箇所である。
- 41 ただし、基底動詞の拡張の方向は互いに正反対で、同族目的語構文の場合は自動詞を基本に他動詞へ、他動詞型結果構文の場合は他動詞を基本に自動詞へと拡張している。

参考文献

一次文献

夏目漱石 (1961/2001⁸⁸). 『我が輩は猫である』. 東京：新潮社 (=新潮文庫).

Dt. Übersetzung: *Ich der Kater*, übersetzt von Otto Putz (1996), Fankfurt am Main und Leipzig: Insel.

宮沢賢治. 東京：新潮社 (=新潮文庫).

『注文の多い料理店』(1990/2011⁴³) [Buch-A],

『ポラーノの広場』(1995/2009⁹) [Buch-B],

『新編 風の又三郎』(1989/2011³²) [Buch-C],

『新編 銀河鉄道の夜』(1989/2011⁵⁷) [Buch-D].

Dt. Übersetzung: *Die Früchte des Ginkgo: Märchenhafte Erzählungen aus Nord-Japan*, hrsg. und übers. von Johanna Fischer (1980/1994²), Stuttgart: Neske.

宮沢賢治著, John Bester 訳 (1972). 『注文の多い料理店』. *The Restaurant of Many Orders and Other Stories*. 講談社インターナショナル株式会社.

宮沢賢治著, John Bester 訳 (1996). 『ベスト・オブ宮沢賢治短編集』. *The Tales of Miyazawa Kenji*. 講談社インターナショナル株式会社.

二次文献

- Bußmann, H. (2002): *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart: Kröner.
- Croft, W. (1991): *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: The University of Chicago Press.
- DGWDS: Office-Bibliothek (2005). *DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache* (2000). Mannheim: Bibliographisches Institut & F.A.Brockhaus.
- Duden Deutsches Universalwörterbuch (2003). 5., überarbeitete Aufl. Hrsg. von der Dudenredaktion. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Grimm, J. / Grimm W. (1935/1984): *Deutsches Wörterbuch*. 33 Bde. München: Deutscher Taschenbuch Verlag (Nachdruck der Erstausgabe 1935).
- Naruse-Shima, R. / Shima, N. (2013): Kognate Objekte im Englischen und Deutschen - Eine kontrastiv-semantische Analyse. In: 京都産業大学論集 人文科学系列 第46号, 371-391.
- 根本道也編著 (2015). 『オノマトペ (擬音語・擬態語) 和独小辞典』. 東京: 同学社.
- 乙政潤 (2009). 『ドイツ語オノマトペの研究: その音素導入契機と音素配列原理』. 東京: 大学書林.
- Porzig, Walter (1950/19715). *Das Wunder der Sprache*. 5. durchgesehene Aufl. München: Francke (= UTB 32).
- Rapp, I. (1997): *Partizipien und semantische Struktur: Zur passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg.
- Schulz, D. / Griesbach, H. (1960/1972): *Grammatik der deutschen Sprache*. München: Hueber (9. neubearbeitete Aufl.).
- Shima, N. (2006): Das kognate Objekt im Deutschen aus sprachtypologischer Sicht. In: Kürschner, W. / Reinhard R. (Hg.). *Linguistik International: Festschrift für Heinrich Weber*. Pabst Science Publishers, 561-576.
- Shima, N. (2010): Über die Vielfältigkeit resultativer Konstruktionen im Deutschen: Ein Erklärungsversuch ihrer Genese. In: 京都ドイツ語学研究会 *Sprachwissenschaft Kyoto* 9, 3-19.
- 島憲男 (2019a): 構文間の機能的関連性 — 内在的目的語を持つ表現と結果述語を持つ表現をむすぶもの. In: 京都ドイツ語学研究会 *Sprachwissenschaft Kyoto* 18, 31-43.
- Shima, N. (2019b): Wie können grammatische Konstruktionen miteinander verbunden werden? Funktionale Korrelation zwischen Kognaten Objekten und Resultativen Prädikaten. In: 京都産業大学 総合学術研究所所報 14, 31-45.
- Shima, N. (2020): Strukturierungen und Erweiterungen der Resultativen Konstruktionen im Deutschen : unter besonderer Berücksichtigung der Transitivität des Hauptverbs und des Resultativen Prädikates. In: 京都産業大学論集. 人文科学系列 第53号, 153-166.
- 島憲男 (2021). ドイツ語の文法的構文ネットワーク: 結果構文と構文研究. In: 京都産業大学 総合学術研究所所報第16号, 25-48.
- Staudinger, Bernhard (1997): *Sätzchen: Small Clauses im Deutschen*. Tübingen: Max Niemeyer (= LA 363).
- Talmy, Leonard (1985). Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In: Shopen, Timothy (Hg.). *Language Typology and Syntactic Description*, Bd. III, *Grammatical Categories and the Lexicon*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 57-149.
- Talmy, Leonard (2000). *Toward a Cognitive Semantics*. Cambridge, MA: MIT Press, 2 Vols.
- 戸川敬一, 榎本久彦, 人見宏, 石村喬, 木村直司, Franz-Anton Neyer, 佐々木直之輔編 (1992). 『マイスター独和辞典』. 東京: 大修館書店.

Functions of Grammatical Constructions in German: Based on Translated Works of Kenji MIYAZAWA

Norio SHIMA

Abstract

This paper examines four German grammatical constructions - transitive resultative constructions (TRK), intransitive resultative constructions (IRK), constructions with cognate object (KO) and constructions with onomatopoeia (ONOM) in the translated works of Kenji Miyazawa, and aims to show how frequently these constructions occur and how these constructions are employed to describe the situations in the texts. Such a text-based analysis will not only enable us to verify and reinforce the author's earlier analysis of these grammatical constructions, but it will also reveal that these grammatical constructions are deeply related with certain fields of human perceptions. Furthermore, it is also argued that the network of these four constructions can be regarded as a general grammatical mechanism that contributes to more concrete, more specific, and more detailed description of each speech situation, which indicates an opposite direction of what Talmy (1985, 2000) calls the "lexicalization" process.

Keywords : resultative constructions, cognate objects, onomatopoeia, human senses, grammatical network of constructions

